

NEWSLETTER No. 69
ISSN 1340-5578
TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ
The Society for Research in Asiatic Music
January 20, 2007

社団法人
東洋音楽学会

会報 第69号

発行 (社)東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152
●E-mail : LEN03210@nifty.com ●ホームページ : http://www.soc.nii.ac.jp/tog/

目次

会長就任の挨拶..... 1	会員異動..... 9
第57回大会レポート..... 1	図書・資料等の受贈..... 11
ICTM 東アジア音楽研究会 第一回研究会の報告..... 6	新刊書籍..... 11
通常理事会・総会議決事項のお知らせ..... 7	新発売視聴覚資料..... 12
会費納入のお願い..... 8	編集後記..... 13
第24回 田邊尚雄賞アンケートのお願い..... 8	第37回通常総会議事録(抄)・添付書類..... 13

会長就任の挨拶

このたびの役員改選にともない、思いがけなくも会長という大任を仰せつかることになりました。当選理事による互選の結果ですので、及ばずながら2年間、微力を尽くす覚悟でお引き受けいたしました。

昭和42年に入会して、私の当学会歴も40年近くになります。大学院生の44年ごろから参事としてお手伝いするようになりました。毎月のように東京藝術大学で開催される定例研究会のあと、町田嘉章副会長、吉川英士理事、岸辺成雄理事、小泉文夫理事ほか何人もの理事の先生方が楽理科の研究室に集まってなごやかに歓談されるのですが、思えば役員連絡会をなさっていたのでしょうか、夕食をはさむかなり長時間の会合だったように記憶します。

このころはまだ「会報」も「支部だより」もなかった時代です。定例研究会に足を運び、書籍紹介・レコード紹介・研究発表・連続講座などから新しい情報や知見をえるのが会員の楽しみであり、定例研究会は一般参加者を含めて会員と直接交流できる学会事業の重要な場でもありました。数年後に所属を変えた関西支部(現・西日本支部)でも同様に、相愛女子大学(現・相愛大学)での定例研究会はいつも熱気にあふれていました。定例研究会を軸に役員が頻繁に集って学会を運営する、というのが当学会の原点だったといえます。

時代は推移し、通信手段の急速な発達によってメール会議やホームページでの情報開示が当たり前となりました。遠隔

地に居ながらの会議参加や意見交換、最新の研究の情報収集が可能となりました。また、平成4年に発足した将来構想委員会に始まり、制度委員会、改革検討委員会などを通して時代にマッチした制度改革に歴代の委員たちが尽力され、選挙制度を中心に大きく変わりました。しかし、まだ日が浅いため、こうした変革が必ずしも十分に浸透し機能しているとは申せません。今後も、より具体的な検討を積み重ねてゆく必要があります。

70年の歴史をもつ東洋音楽学会のよき伝統を継承しつつ、数年来積極的に推し進められてきた改革へのエネルギーを後退させないよう、精一杯努力いたします所存です。会員の皆さまのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

(月溪恒子)

第57回大会レポート

(2006年10月7日～8日/京都市立芸術大学)

第1日(10月7日)

◇公開講演会

ボニー・ウェイド Bonnie C. Wade 「音楽の知そして平和 Musical Knowledge and the Advocacy for Peace」

京都市立芸術大学が主催する「京都国際会議2006 芸術がデザインする平和のかたち」にも組み込まれた本学会恒例の公開講演会は、地球的規模で平和を希求する現在の私た

ちにとってまことに示唆に富むものであった。象牙の塔に籠もる学問よりも、社会的に意義のある研究や活動に音楽学者も努力すべきだという主張は、目新しいことではなく、アラン・メリアムを初め多くの民族音楽学者たちが示してきたことだった。ウェイド氏の講演が印象的であったのは、彼女が専門とする日本やインドの音楽にこだわらず、現代アメリカ的な視野から選んだ音楽や音楽教育研究の例を豊富に挿入しつつ、彼女自身の体験や知見を日本語で私たちに語りかけてくれた姿だった。1年以上におよぶコーディネータ藤田隆則氏との議論から生まれた成果であったことも記しておこう。当日、英文の元原稿と実際に彼女が音読した日本語訳を対訳のかたちで大部のコピーが配布されたことも藤田氏の配慮からだ。さらに、翌日大会終了直後にきわめて気楽に参加できるウェイド氏を囲む集いまで用意されていたので、講演内容はもちろん、彼女の日本体験や著書についても語り合うことができた。両日私が実感したのは、「アメリカにおける民族音楽学の歴史」を代表する彼女の半生が語られたことだった。

カリフォルニア大学バークレー校音楽学部教授のウェイド氏は、SEM (Society for Ethnomusicology 民族音楽学会)の元会長でもある。カリフォルニア大学ロサンゼルス校に提出した山田流箏曲についての修士論文、北インド古典声楽についての博士論文、さらに図像学的な観点からのインド研究や現代日本音楽研究へと守備範囲を広げてきた (<http://ls.berkeley.edu/dept/music/Wade.html>)。他方、比較的新しい *Music in Japan: experiencing music, expressing culture* (Oxford University Press, 2004) [『東洋音楽研究』第70号に上野正章氏による書評]や *Thinking musically: experiencing music, expressing culture* (Oxford University Press, 2004) がアメリカの大学における教養課程や専門課程での教科書として好評を博していることからわかるように、日本音楽を新しい視野から論じるだけでなく、地球規模で音楽の仕組みや社会的意味を説く姿勢が彼女の現在なのだろう。本講演は、まさにその延長線上にあったと言ってもよい。(山口修)

◇特別公演会「黄檗の声明(梵唄)」

本大会では、黄檗山万福寺の出仕により、特別公演として「祝聖儀朝課(しゅくしんぎちょうか)」が行われた。

公演に先立って、澤田篤子・赤松達明両氏から黄檗宗の儀礼や声明、歴史や文化についての解説があり、次いで公演となった。

壇上正面に達磨大師の画像を掲げ、供養具をしつらえ、式

衆は衣体を整え、拈香・礼拝などの所作を伴い、法要の次第も[巡照(じゅんしょう)][出頭半鐘(しゅつとうはんしょう)][拜太鼓(はいたいこ)]~[拜班(はいばん)]まで一部に略式を交えながらも省略なく勤められたので、現地で法要を聴聞する趣があった。

黄檗宗の声明に接する機会は少ない。ことにこの宗の場合、すべての詞章を唐音(とういん)で唱えるため、一般の者が唱句を聞き取って法要の意義を理解するには訓練を要する。振り仮名付きの詞章が配布されたのは適切だった。

反面ではその発音の美しさが心地よい。それに加えて、それぞれの曲が太鼓・磬子(けいす)・木魚・鐺鉢・引鑿(いんきん)など多彩な鳴らし物で拍節を刻みリズムを主導する、という特色も際立つ。にぎやかな鳴らし物に乗って斉唱される[香讚]、緩やかに独唱される[疏]、節なく明確に拍を刻んで読み進む[千手千眼無礙大悲陀羅尼]や[般若波羅蜜多心経]、速読と緩唱の対比が際立つ[祝伽藍儀]など、音楽性豊かな黄檗宗の声明に触れることができた一時であった。

(佐藤道子)



特別公演会「黄檗の声明(梵唄)」

◇展覧「日本伝統音楽研究センター所蔵 田邊コレクションの楽器」

田邊コレクションの楽器は、300点以上あるが、今回の大会では、10数点が選ばれて展示されていた。展示楽器をメモする時間がなかったので、その正確な数と名称を報告することはできないが、私は展示された楽器のどれを眺めても、田邊尚雄・秀雄両先生の研究旅行やそれぞれの楽器と音楽への実ユニークな思考などが思い出された。そこで、ここでは大会プログラムの展覧とワークショップ、そして『日本伝統音楽研究センターの楽器コレクション図録』に記されていない、当コレクションの特徴と楽器収集の秘話の一部を披露する。

1. 田邊コレクションの楽器は、例外はあるが、どの楽器も

その音楽演奏の録音、または正確な記録や楽器演奏の採譜がある。

2. 大正10 (1921) 年、尚雄先生の朝鮮雅楽調査の折、朝鮮李王家に伝わる文廟楽で用いられる埴 (hunフン)、敵 (0オ)、排簫などが李王家雅楽部から贈呈された。しかし、1950-53年の朝鮮戦争のため、李王家雅楽部を継承した韓国国立國楽院には、李王家時代の楽器のほとんどが消失していた。1974年に、そのことを知った秀雄先生は、在日韓国大使館を通して國楽院に敵を返却した。現在のコレクションの敵は、その返礼として田邊家に代納されたレプリカである。ちなみに、図録に記されている笛 (hun) とは、正しくは埴 (hun) であることを指摘しておく。漢字も笛ではなく埴。

3. 現地調査で出会った音楽家の演奏を録音している楽器の展示品の例

西北インドのラージャスタン地方の放浪詩人が使うラバナハッタほか9点。

4. アフリカの楽器と東南アジアの楽器の一部は、1970年の大阪万博の公式行事の一つであった、「アフリカの祭り」と「アジアの祭り」が万博広場で行われた際、当時のイースタン・ミュージック (磯村社長と録音技師) と秀雄先生が行ったという関係で収集されたもの。(草野妙子)

◇田邊尚雄賞授賞式ならびに懇親会・田邊尚雄賞祝賀会

第22回田邊尚雄賞授賞式は、10月7日、会場の京都市立芸術大学の講堂で、黄檗山万福寺の声明公演に続いて行われた。今回の受賞者は、『平安朝の雅楽 古楽譜による唐楽曲の楽理的研究』の著者遠藤徹氏と、『体現芸術として見た 寺事の構造』の著者横道萬里雄氏である。選考委員長徳丸吉彦氏から、授賞の理由として、遠藤氏の著書は、雅楽の伝承変化の問題を動的にとらえた点が評価されたこと、横道氏の著書は、仏教寺院の行事を寺事とよび、その体現芸術 (芸能) としてのありかたを広く音楽の周辺の事象にまでひろげて分かりやすく記述した点が評価されたことが述べられた。受賞者の挨拶の中で、遠藤氏からは、雅楽研究を始めたきっかけが東洋音楽学会の30周年記念に企画出版された『東洋音楽選書』であったこと、横道氏からは、2度目の授賞であることと年齢を考えて一度は受賞をためらったが、これを機会に寺事研究に光が当たるようにと、受賞を承諾するに至った経緯が述べられた。

懇親会は、同じ学内の大会館交流室で行われた。今田健太郎氏の司会で、賑やかに会員の歓談が進み、丹波ワインが振舞われるなど、この地ならではのもてなしもあり、大いに盛り上がった。賑やかさのあまり、田邊賞祝賀会の受賞者挨拶

が聞き取りにくくなってしまったのは残念だったが、また懇親会では大会実行委員への感謝とねぎらいの表明の機会がなかった。この紙面を借りて、大会実行委員の皆様への謝意を、出席者の一人として表したい。(薦田治子)

第2日 (10月8日)

◇研究発表 A (司会: 遠藤徹)

「東大寺における舞楽法会の音楽— 一二〇〇年前後の東大寺供養会と華嚴会の比較による—」(鳥谷輝彦)

発表者は中世の舞楽法会における奏舞奏楽の形を明らかにしようと試みる。新楽、高麗、林邑、古楽などの外来の音楽を左右に配する左右两部制は10世紀以降、今日に至るまで続く認識されてきた。これに対し発表者は、実際には三部制や四部制といった規格外の形態が中世でも続いていたとし、東大寺での法会をとりあげ、当時の資料、楽書などをもとに実証する。

東大寺の法要のうち、国家行事である供養会と、寺院の年中行事である華嚴会に注目し、12世紀末から13世紀初めの各3回の法会を選定し、比較を行う。まず、楽人が演奏を行う楽屋の位置を再現する。供養会が寺院前庭の内部に四つの楽屋を配置する四部制の形をとるのに対し、華嚴会では南大門を始めとした寺院の外枠に楽屋を配置する三部制であることが、図により示された。つぎに法会の次第をもとに、楽屋を出た楽人・舞人の行列の作り方や寺院内での行列の動きが図示される。三部制、四部制の特色は、多様な音の聞こえ方にあることが示された。発表者は寺院のどこから音が聞こえてくるのかに目配りをし、時間経過とともに変化する法会の音楽的空間を立体的に示そうとする。

これらの法会が踏襲した先例、及び法会に参加した楽人の所属が検討された結果、法会は寺院独自の先例に従って編まれるため、全国共通の規格がなく、三部制、四部制が残存したと結論づけられた。

司会の遠藤氏より、華嚴会のモデルとなった法会について、また、左右两部制ではないほかの寺院との関連について質問がなされた。(丹羽幸江)

「五月五日節と相撲節における奏楽— 場の論理より奏楽の脈略を読む—」(平間充子)

発表者は古代日本の朝廷儀礼における音楽・芸能の奏上の意義を、儀礼自体の性質から検証する。日本古代史学の分野である宴饗儀礼研究の成果を踏まえ、『延喜式』などの儀式書類の記述をもとに、武力に関連した二つの節会を取り上げる。

まず五月五日節は競馬と呼ばれ、馬を用いた儀礼が三日間行われる。儀礼の政治的意味合いに応じて、異なった奏楽機関が使い分けられる。近衛府の奏楽は天皇への服属儀礼の意味を持ち、雅楽寮のそれは天皇および儀式の荘厳化の意味を持つとする先行研究を引く。さらに発表者は、國栖奏は節会に必ず付帯し、節会の威儀を整える役割を担うとする。

次に相撲節では年毎に編成される相撲司に着目する。相撲司が自前の伎楽面や装束を持つことを史料で示し、歴史が下るにつれ相撲節が芸能大会としての意義を強めたという先行研究の説をもとに、相撲司が相撲節に固有の芸能機関として、雅楽寮以外にも必要とされたと考える。

以上により、奏楽が儀礼の意義を反映する可能性が指摘された。武力と同様に、音楽・芸能の奏上が服属儀礼的な役割をもつことが強調された。特に律令制に基づかない令外官である近衛府の奏楽は、臣下から天皇への服従を強調するなど、天皇と臣下の関係性を奏楽機関が表象する。一方、余興・娯楽としての芸能・音楽は、相撲節のように後代の節会自体の意義の変化を受けて生じた。

フロアからは、漢字の読み(打毬)についての質問などのほか、社会の変化を反映する音楽という表現についての質問があった。(丹羽幸江)

◇研究発表 B (司会: 薦田治子)

「豊竹呂昇の娘義太夫改良論、その意義と問題点——呂昇の再評価の試みとして——」(廣井榮子)

本発表では、明治から大正にかけて一世を風靡した豊竹呂昇が、女義太夫改良を試みた時代的背景と改良の意図・内容、そして呂昇の改良が当時の聴衆・評論家にどのように受け止められたかが述べられた。分析には、呂昇と綱大夫の演奏記録SPレコード「十種香の段」(『本朝廿四孝』四段目)が用いられた。

名古屋生まれで大阪で修行、大正末引退した呂昇は、世話物が得意であり、その美貌と華やかな声で人気があった。呂昇の試みた改良は、主として①床本の詞使い、②淫猥な文句・残酷な場面の削除、③荒唐無稽な筋の改良、④上演時間の短縮、などで(参考資料: 大正13年発行「都保美連規約(つぼみれん・きやく)」)、女義太夫に洗練された「高尚優美」な位置づけを与えたいと考えたことによるものだった。

「改良」の音源例は語句の例で、「十種香」の「添い臥しの」の部分。呂昇はこの言葉の淫猥なイメージを払拭するために詞章を変えた。また、「小さい餓鬼でも」(『伽羅先代萩』)を「小さいものでも」と変えるなど「改良」は部分的改変に留まっている。後例は、あとに続く詞章の密度を弱めてしまっ

たとの時評も出たそうだ。呂昇の義太夫を評して、人物の語りわけが明確でなく器用に美しく歌っているだけ、と述べた時評もあった。しかし、まだ義太夫を聴いたことのない聴衆を開拓した「義太夫宣伝」の功績は大きかったと分析された。当時は「女義太夫はまじめに聴くものにあらず」とまでいわれ、呂昇の「改良」はこのような意見に反発したものと言える。できれば「改良」部分の聴覚資料の視覚的な提示があれば、より具体的に理解できたであろう。いずれにしても、呂昇の活動は、音楽による徳育教育が主流であった時代背景なしに考察できないと感じた。芸能が芸能としてのエネルギーを持つことの要因が、使用する用語の力によることを考慮すると、呂昇の考えた「改良」の是非は、一時代の論議に留まらないであろうし、「改良」の用語がふさわしいかどうか議論となろう。(茂手木潔子)

「近代における義太夫の伝承——歴史的音源資料による『菅原伝授手習鑑』四段目「寺子屋の段」の比較分析研究——」(垣内幸夫)

垣内氏の義太夫研究歴は長く、発表者自身も義太夫を語れるほどの義太夫通である。したがって、発表は御自身の語りも交えて行われた。

研究方法は、①芸談・劇評を中心とした書伝情報の検討、②SPレコード、LPレコード、ラジオ等の音源比較(東京文化財研究所所蔵安原コレクション、NHK文化財ライブラリー所蔵資料など)、③奏演者による芸談の音声記録の分析(今回は、NHK文化財ライブラリー所蔵の竹本綱大夫・竹澤弥七「風の研究」)、④明治期の演奏を記録した朱(5世廣助、6世廣助、団平)を用いての研究だった。発表では、山城少掾が全段を記録した「寺子屋の段『菅原伝授手習鑑』」の3種類の貴重な音源も提示された。

分析の焦点は、これまでも垣内氏が持ち続けてきたテーマである義太夫節の風(文楽系と彦六系)に関する内容であったが、「寺子屋」の「どりゃ こちの子と近づきに」を例に挙げ、「どりゃ」の部分「色」で語るか「やや節をつけた形」で語るかの違いが文楽系と彦六系にある点、また、四段目風スエテについては、一の音に落ちる(一の糸の音高まで下げ)落ち方の違いや、ギンの音(本調子三の糸開放弦の完全5度上)に、声が到達するかどうかの違いがある点を言及したが、文楽系・彦六系の分類には、他の伝承系統も含まれることがあり、複雑化を呈している点に言及した。

垣内氏が収集された多くの情報を、短い発表時間に詰め込もうとされたため、本題の「伝承」に関する具体的発表の部分の時間が少なかつた点が残念だった。本研究の分析部分の詳細を、何らかの形で発表されることを望みたい。また、次

回は、焦点を当てた部分を具体的に発表するための時間配分も考慮されてほしいと希望する。(茂手木潔子)

◇研究発表 C (司会：金城厚)

「琉球列島の旋律における「アゲ」と「サゲ」の概念

(マツト・ギラン)

発表者によると、「琉球列島」では同一楽曲のバリエーションとして「高音」から歌いだす演奏法(アゲ、アギ等)と「低音」から歌いだす演奏法(サゲ、サギ等)があり、この2種類の演奏法の区別は広範囲に存在する。この区別は古典音楽・民謡から儀礼歌謡・仕事歌にいたるまでジャンル横断的に存在し、また演奏者によって意識的に行われているため、多様な琉球列島の音楽に共通する重要な構造的要素の一つであるという。発表の目的は、この演奏法の実例を、その形式、文化的側面と関連付けながら、分析することであった。発表では、この演奏法の呼称を地域別に概観した後、沖縄本島の「ナークニ」、八重山の「ウティナン・スサナン」、沖永良部の「さいさい節」などを例にして、技法の使用実態を紹介した。次に、「アゲ」「サゲ」の使い分けが、歌手の好み(場の雰囲気、強い感情の表現など)や、歌詞の内容との関係において決定されることがあるという興味深い事例が報告された。たとえば、与那国ではアギが「先輩への尊敬」、サギが「教訓的な内容」に対応するという。最後に、楽譜や録音の導入により民謡演奏の固定化が進んでおり、場により「アゲ」または「サゲ」を選択する演奏慣習をどのように伝承するかが、今後の大きな課題であることを指摘して発表は終了した。フロアからの指摘のように、古典音楽の例が示されなかったのは残念であるが、発展性のあるテーマであるだけに今後の研究の進展に期待したい。(寺田吉孝)

「ラオス・チャンパサック地域の楽師にみる記憶とその演奏」

(嶋尾かの子)

記譜体系を持たないラオスの古典音楽において音楽はどのように記憶されるのか。この問題を解き明かすために、発表者は、演奏者の精神性と、音楽構造(旋律の骨格の抽出など)という一見全く次元の異なる側面を取り上げた。発表の前半では、入門式ワイ・クーで凝縮的に表現される始祖・師匠への敬愛が古典音楽演奏の大前提になっている点を指摘し、後半では譜例を用いて楽曲の旋律を3種類に分け、それぞれ何が音楽の記憶を助けているかを検討した。

ラオスは他の東南アジア諸国に比べ研究が遅れており、また調査が困難であることを考えると発表者の存在は貴重である。また、音楽の記憶というテーマが、多くの研究者の関心

事であることは発表後の質問からもうかがえた。しかし、今回の発表は比較的短期間の現地調査に基づいており、全体として中間報告的性格が強かった。師匠や伝統への畏怖がどのように音楽の記憶のプロセスと関連するかが明示されなかったため、この2点に絞って発表を行った理由がわかりにくかった。また、演奏家の「語り」は、その重層性や発話のコンテクストを慎重に考慮すべきであるが、考察における「語り」の使い方がやや恣意的、直線的にすぎる印象が残った。発表者自身の学習体験が記憶の問題への関心の端緒となった点は理解できるが、記述の主体(現地の演奏家、異なる文化的背景をもつ調査者)が不明瞭な箇所も散見された。より時間をかけた現地調査とデータの慎重な分析が望まれる。

(寺田吉孝)

◇研究発表 D (司会：福岡まどか)

「グンデル・ワヤンを競う―バリの伝統音楽と競技会―」

(増野亜子)

本発表は、インドネシア、バリ島のデンパサール市において2005年からはじまったグンデル・ワヤンとよばれるガムラン編成の競技会をとりあげ、その成立過程、諸特徴と結果をもたらす諸事象について論じたものである。まず発表者は、さまざまなバリのガムランの競技会が早くから開始されたのに対し、グンデル・ワヤンの競技会が青少年の育成を目的として近年に始められたことに注目する。こうした現象は、バリの民俗用語であるデサ・カラ・パトラ(配布資料によると、場所、時、文脈・状況という意)によって説明され、それまで儀礼や影絵芝居と関わってきたグンデル・ワヤンが、儀礼や演劇と分離され、それ自体に意味と価値が与えられることで、新しいデサ・カラ・パトラの上に成立したことを明らかにする。その結果、グンデル・ワヤンは、観客と審査員の注目の的となり、演奏の優劣が講評され、さらには序列化されるだけでなく、そのパフォーマンスは過度な視覚的側面が強調され、技巧的な演奏へと変化していったことを指摘する。その一方で、課題曲の設定の方法によって各村落の演奏様式やレパートリーが画一化する可能性を指摘する。

これまでのバリ音楽研究において、フェスティバルや競技会の研究は、文化政策の側面から、その成果を「政策が意図したもの」として論じることが多かった。しかし本発表は施策者側という「上」からの視点だけでなく、それらの競技会を実際に計画し、運営する人々を通して論じたことに特徴があろう。その点では、文化政策として実施される音楽や芸能の研究方法として、重要な研究視点を提供した研究発表であった。(梅田英春)

「バリの声楽タンダッの歌唱様式」(與那城常和子)

本発表は、バリの声楽研究の中でも、特にバリの諸芸能と結びつき、ガムランの演奏に付随して歌われる歌唱タンダッの歌唱様式を分析し、その諸特徴を明らかにしたものである。発表者が具体的事例としてとりあげたのは、宮廷舞踊レゴン・クラトンにおけるタンダッの歌唱である。発表では、最初にレゴン・クラトンの音楽的特徴を明らかにし、その特徴を「アルス」(上品、やさしい)、「ガガー」(粗野、力強い)に分類し、それぞれの部分で歌われるタンダッには異なる特徴があることを指摘する。「アルス」の部分では、ガムランと歌唱の相対関係は厳密で、旋律、中核となる音、ゴングなどの位置と細部にわたり関係性があることを具体的に指摘し、「ガガー」の部分では、ガムランと歌唱との関係は、希薄であり、歌唱者はそれぞれ「自由」であることを主張しながらも、実際には、個々の歌い手が保持するガムランと歌唱の緩い規則が存在することを明らかにする。

これまでのバリの歌唱研究は、古典的な声楽に分類される韻律詩等に基づく歌唱様式研究が中心をなしてきており、タンダッを具体的に分析した研究は見あたらない。そうした意味で本発表は新たな研究テーマの扉を開いたことに大きな意味をもつ。しかし、フロアーからの質疑の中でも指摘されたように、ジャワのガムランにおける歌唱とガムランの諸関係との比較、また音楽と歌唱だけでなく、舞踊や演劇との関係についても研究を広げていくことで、さらに一歩踏み込んだタンダッの研究が可能になるであろう。(梅田英春)

◇研究発表 E (司会：寺田吉孝)

「中国大陸における古箏の楽器改良」(毛 Y)

中華人民共和国における古箏(グージョン)をとりあげて、その楽器改良の過程を明らかにしようとする。発表者によれば、従来より山東、河南、陝西、広東、上海の地域においてそれぞれ独自の箏が伝えられていたが、政府の文化政策や教育制度の整備と普及によって、盛衰・統合を余儀なくされた。箏という楽器そのものも、そうした状況に連動しながら、サイズを大きくしたり形状の細部を変更したり、あるいは絃の数を多くしたり転調を可能にしたりといった試みと取捨選択がなされ、その結果「S型21絃箏」というモデルに標準化された。現在はこれが大量に生産されて、主に子供たちの教育活動に用いられているという。

中国の事例とはいえ、日本の音楽事情と共通する点が少ないから見えだされるのではないだろうか。たとえば、政府の文化政策(学習指導要領)と楽器の標準化は、鍵盤ハーモニカやリコーダーを想起させるし(考えてみれば、これらも改

良楽器だ!)、教育制度の整備と普及といえばヤマハや鈴木バイオリンの音楽教室、さらに「なぜ箏が選ばれるのか」という質問に対する「女性らしさと結びついているのではないか」という返答は、日本のピアノ事情とほぼ同じだ。

こうした、いわば日本を映し出す「鏡」としての可能性はもちろんのこと、むしろ逆に相違を強調することで、私たちの期待や常識からこぼれおちたものをひろいあげることもできよう。これぞ留学生の強みだろう。(今田健太郎)

「インド音楽にみる近代化と伝統の相克：楽器産業の現状観察から」(田中多佳子)

インドの伝統音楽において、その音楽家たちと彼らの使う楽器を製作・販売する人々との相互関係にあらわれる、近代化・西洋化の諸相を明らかにしようとする発表である。発表者はまずシタールという楽器製作の、コルカタにある工房とミラージュの職人たちのふたつの例を挙げて、その素材、製作過程、歴史、音楽家たちとの関係などを対比させ、それぞれで棲み分けていることを指摘した。それら職人たちの工房はさらに、大規模量産店という音楽愛好家たちに開かれた製作・販売形態と対比されることになる。また音楽家たちは、職人によって作られメンテナンスされる伝統楽器を使いながら、他方で電子楽器や外来楽器も抵抗なく導入している。

とにかく取りあげられる話題が多岐に渡るうえにそれぞれの情報量も多く、要約を拒むほどである。インド伝統音楽における楽器の現状を総括しようとする意思がうかがえよう。また発表者は、伝統楽器といえども古体をとどめるのではなく、状況に応じて変容していくことを肯定する立場をとる。これは現在の日本における、固定や保存を旨とした「伝統」概念の相対化をもくろんでいると思われ、その試み自体は評価されるべきだろう。ただ、そこで見いだされたはずの変容の内容についての説明が少なかったため、やや唐突な印象が残った。たとえば、楽器と「表裏一体」と位置づけたはずの「音楽」との関係についてはどうなのだろうか。続報を期待したい。(今田健太郎)

ICTM東アジア音楽研究会 第一回研究会の報告

去る2006年8月31日から9月2日にかけて、台湾の宜蘭国立伝統芸術センターにおいて、ICTM東アジア音楽研究会の第一回研究会が行われた。2005年8月に、イギリスのシェフィールドでICTM(国際伝統音楽学会)の世界大会が行われた際、塚田健一氏を含む一部の研究者の間で、東アジア音楽研究会の発足の必要性が話し合われた。このときの議論と、その後の電

子メール上のやり取りを通じて、「東アジア音楽と現代性」と題された今回の第一回研究会が実現した。主催を買って出たのは、宜蘭国立伝統芸術センターと南華大学である。同センターの主催する2006年アジア太平洋伝統芸術フェスティバルの開催に合わせて本研究会を行うことになったこともあり、ホスト国台湾のスタッフたちは、限られた時間内での準備に大奮闘であった。

このような事情もあり、今回の研究会の開催、及び発表原稿募集のお知らせが、開催期の5~6ヶ月前と、通常の学会の場合よりもかなり遅くなってしまった。それにもかかわらず、日本、台湾、韓国、中国、マレーシア、シンガポール、オーストラリア、イギリス、アメリカ合衆国、オーストリア、オランダを含む各国から100名以上が参加し、うち34名が研究発表を行った。また、基調講演者として徳丸吉彦氏が、その他の招待講演者として以下6名が参加した。YANG Mu (University of New South Wales, Australia), Deborah WONG (University of California, Riverside), PARK Mikyung (Keimyung University, Korea), Keith Howard (University of London), YANG Yandi (Shanghai Conservatory of Music), Fred LAU (University of Hawaii, Manoa) (発表順、敬称略、大文字は姓)。今回の研究会では、徳丸氏からの寄付により優秀学生賞が設けられ、Harm Langenkamp (Utrecht University, Netherlands)、及びHsin-chun Tasaw Lu (University of California, Los Angeles) の2名が受賞された。また、日本からの参加者として、当学会員の楊桂香、平間充子、高瀬澄子の各氏が、「中国・日本と音楽史」と題されたセッションとともに発表された。他の東アジアの国に比べて、今回日本からの参加者が少なかったのは残念だった。

今回の研究会の成果を踏まえ、ICTM理事会では、東アジア音楽研究会の正式な発足を認可した。そこで、改めてこの研究会の目的、および今後の目標をお知らせしたいと思う。この研究会は、国籍を問わず、あらゆる研究者に開かれたもので、東アジア音楽研究者間の国際的なコミュニケーションの促進を図ることを目的としている。特に東アジアの研究者に関しては、言語の壁から国際学会への出席率が低く、それが東アジアの音楽学に対する国際的な関心の低さにもつながっている。当研究会では、東アジアの研究者が英語で発表しやすいような、友好的でプレッシャーの少ない環境を提供し、東アジア各国の研究者同士、さらには東アジアとそれ以外の地域の研究者との学問的交流を促進したいと考えている。学生の参加もおおいに歓迎する。また、「東アジア音楽」の定義も限定的ではなく、各研究者の認識に任せるという柔軟な姿勢をとっている。

今後の目標としては、以下のような項目が挙げられている。

1) 隔年で行われるICTMの世界大会の合間を縫って、隔年で(偶数年に)会議を行う、2) メンバーの交流促進のため、ウェブサイトの設置、各種案内の配布等を行う、3) 会議やジョイント・プロジェクトの成果を出版する。さしあたっての大きな課題は、研究会開催地の確保だろう。当研究会の開催地となる意志のある機関は、開催日程、テーマ、会議の仮日程表、会議開催準備のタイムテーブルを含む申請書を、開催日の最低一年前までに当研究会に提出してほしい。日本国内の希望者は、執行委員の早稲田みな子 (minako_waseda@msn.com) までご連絡ください。また研究会への入会手続きはウェブ上で行えるよう準備中。ウェブサイトが設置され次第お知らせします。多くの方の参加を期待しています。

(ICTM東アジア音楽研究会、執行委員、早稲田みな子)

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

去る10月8日(日)に京都市立芸術大学で開かれた臨時理事会において、新年度の役員が以下の通り決まりましたので、お知らせいたします。

◆理事

[会長] 月溪恒子

[副会長] 薦田治子

[東日本支部長] 塚原康子

[西日本支部長] 福岡正太

[沖縄支部長] 久万田晋

[総務] 植村幸生、小塩さとみ、(田邊尚雄賞担当) 茂手木 潔子

[経理] 薦田治子、加藤富美子

[機関誌] 大谷紀美子、澤田篤子、寺内直子、永原恵三

[広報] 尾高暁子、野川美穂子

◆参事

(本部)

[総務] 岡田恵美、武内恵美子、土田牧子、鳥谷部輝彦、中村麻衣子

[総務・田邊尚雄賞] 松本奈穂子

[機関誌] 黒川真理恵、中津川祥子、東元りか

[広報] 青柳万紀子、重田絵美、柴田真希、新堀歓乃、瀧知也、星野厚子、柳澤久美子

(東日本支部)

[例会] 大沼覚子、葛西周、河内暁子、熊澤彩子、

角美弥子、谷口文和、原納愛、福田裕美、吉岡三貴

[総務] 大沼覚子、葛西周

[支部だより] 熊沢彩子

[HP] 角美弥子

(西日本支部)

[HP] 今田健太郎

[例会・支部だより] 嶋尾かの子、田渕夏季、出口実紀、
米山知子

(沖縄支部) 飯田くるみ、長嶺亮子、與那城常和子

◆ 東日本支部委員

[支部長] 塚原康子

[支部担当理事] 尾高暁子

[経理] 小柴はるみ、高瀬澄子

[HP] 中村美奈子

[例会] 井上貴子、内田順子、岡崎淑子、奥山けい子、金光
真理子、田中美加、前原恵美、横井雅子、早稲田みな子

[支部だより] 尾高暁子、近藤静乃、前原恵美

◆ 西日本支部委員

[支部長] 福岡正太

[経理] 竹内有一

[HP] 山口修

[例会] 岩井正浩、龍村あや子、寺田吉孝、中川真、
水野信男

[支部だより] 奥中康人、谷正人

◆ 沖縄支部委員

大塚栞子、狩俣康子、マツ・ギラン、新城亘

◆ 会報編集委員会 (○印は委員長、以下同じ)

青柳万紀子、尾高暁子、重田絵美、柴田真希、新堀敏乃、
瀧知也、○野川美穂子、星野厚子、柳澤久美子

◆ 機関誌編集委員会

大谷紀美子、黒川真理恵、澤田篤子、寺内直子、中津川祥子、
○永原恵三、東元りか

◆ 情報委員会

今田健太郎、○小塩さとみ、久万田晋、角美弥子、
中村美奈子、マツ・ギラン、山口修

◆ 改革検討委員会

○植村幸生、遠藤徹、月溪恒子、茂手木潔子

また、各支部の所在地が新年度より以下のように変更になりました。

東日本支部

東京都台東区上野公園12-8 東京芸術大学音楽学部楽理科
塚原研究室気付

tsukahar@ms.geidai.ac.jp

電話 050-5525-2357 ファクス 050-5525-2522

西日本支部

吹田市千里万博公園10-1 国立民族学博物館

福岡研究室気付

fukuoka.shota@nifty.com

電話 06-6878-8351 ファクス 06-6878-7503

沖縄支部

那覇市首里当蔵町1-4 沖縄県立芸術大学附属研究所
久万田研究室気付

s-kumada@ken.okigei.ac.jp

会費納入のお願い

9月1日より本学会の2006年度(2006年9月1日～2007年8月31日)に入りました。今年度は、年度初めに多くの会員から会費の納入をいただきました。御礼かたがた御報告申し上げます。

まだ会費をお払いいただいていない会員の方には、会費請求書と振替用紙を同封いたしましたので、未納金額をお確かめのうえ、早速お払い込みくださいますよう、お願い申し上げます。払い込み用紙を紛失された場合は、学会事務所にお問い合わせください。また複数年度の会費が未納で一括納入が難しい方は、単年度ずつ分割してお払いくださることも可能です。お支払いのあった年度から遡って機関誌を送らせていただきます。なお、本会報と行き違いに納入がありました場合は、どうぞご容赦ください。

第24回 田邊尚雄賞アンケートのお願い

第24回田邊尚雄賞は、下記の要領で選考・授与されます。その選考対象となる会員の業績について、皆様からの情報を募集いたします。会員各位のご協力をお願いいたします。

- 選考委員 小柴はるみ(委員長)、水野信男、藤田隆則、塚原康子、青柳隆志

- 対象期間 2006 (平成18) 年1月1日～12月31日。
- アンケート締切: 2007 (平成19) 年2月22日 (木) 必着。
- アンケート記入事項: 著者名、著書名、発行年月日、発行所名。なお、論文の場合は、以上のほか、掲載誌名、巻次、編集者名、論文頁数を記入してください。
- アンケート送り先:
〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3三春ビル307号
(社) 東洋音楽学会第24回田邊尚雄賞選考委員会

- 『音楽学』第52巻1号 日本音楽学会
- 『中島雅楽之都先生略伝(十四)』
吉田倫子著 正派邦楽会
- 『北海道立アイヌ民族文化研究センター年報2005』
- 『アイヌ語地名を歩く—山田秀三の地名研究から—
2006・釧路／十勝』
北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 『琵琶を知る』 中村鶴城著 出版芸術社 ☆薦田治子
- 『日本国内の伝統楽器に関する調査報告(3)
—関東地方—』 国立音楽大学 楽器学資料館
- 『Bulletin of Vietnamese Institute for Musicology』
No. 18 Vietnamese Institute for Musicology
- 『猿田彦大神フォーラム年報 あらはれ』第9号
猿田彦大神フォーラム
- 『明治以前 薩摩琵琶史私考』 島津正著 ペリかん社

会員異動

名簿記載事項の訂正・変更・追加

(2006年8月～11月、訂正箇所は下線部)

<会員異動は、個人情報保護のため削除しました

以下、ページ番号が目次とずれておりますのでご注意ください
>

◇郵便戻り

小野孝幸、福田裕美、水谷清佳

連絡先をご存じでしたら事務局までご一報ください。

◆住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファクス、E-mail等でも結構です)

◆改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。(複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等)

◆事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨ご明記ください。

図書・資料等の受贈

(2006年8月～11月、到着順)

☆は寄贈者 (発行者と同一の場合は省略)

- 『楽道』8, 9, 10, 11月号 正派邦楽会
- 『白い国の詩』2006夏, 秋号 東北電力(株)
- 『ぎふ民俗音楽』第68, 69号 岐阜県民俗音楽学会
- 『阪大音楽学報』第4号 大阪大学音楽学研究室
- 『桑名石取祭総合調査報告書』
- 『桑名石取祭』(DVD) 桑名市教育委員会
- 『東方學會報』No. 90 (財) 東方学会
- 『日本音楽学会会報』第68号

新刊書籍

- 『20世紀音楽』宮下誠、光文社、1,050円
- 『20世紀におけるペルシア伝統芸術音楽の伝承』阪田順子、冬至書房、3,990円
- 『20世紀の芸術と文学—ピアソラ、その生涯と音楽』マリア・スサーナ他著、アルファベータ、3,570円
- 『いま、胎動する落語苦悩する落語2』春風亭小朝、ぴあ、1,680円
- 『江戸っ子と助六』赤坂治績、新潮社、714円
- 『円朝さんまい よみがえる江戸・明治のこぼれ』森まゆみ、平凡社、1,890円
- 『大蔵虎明能狂言集—翻刻・註解(上巻、下巻)』大塚光信編、清文堂出版、上下巻で28,000円
- 『阿国かぶき前後』小笠原恭子、岩田書院、9,240円
- 『オニを迎え祭る人びと—民俗芸能とムラ』御影史学研究会、藤原喜美子、岩田書院、6,195円
- 『面白いほどよくわかる落語の名作100(学校で教えない教科書)—あらすじで楽しむ珠玉の古典落語』金原亭馬生(11世)、日本文芸社、1,470円
- 『音楽の文章セミナー(プログラム・ノートから論文まで)』久保田慶一、音楽之友社、1,995円
- 『上方落語家名鑑ぶらす上方噺』上方落語協会、出版文化社、1,799円
- 『KAWADE道の手帖—武満徹』河出書房新社、1,575円
- 『感動とは何か—映画音楽の現場から』久石譲、著角川書店、760円
- 『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集4—伊勢平氏年々鑑』義太

- 夫節正本刊行会、玉川大学出版部、2,300円
『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集5—尊氏将軍二代鑑』義太夫節正本刊行会、玉川大学出版部、2,300円
『虚竹の笛一尺八私考』水上勉、集英社、733円
『近代歌舞伎劇評家論(増補版)』権藤芳一、演劇出版社、2,500円
『心の調べ』宮城道雄、著河出書房新社、1,680円
『心をつなぐ音楽回想法』師井和子、ドレミ楽譜出版社、1,575円
『箏の音に魅せられて』矢島武子、文芸社、1,155円
『言の葉摘み』宮沢和史、新潮社、1,470円
『これならわかる、能の面白さ』林望、淡交社、1,890円
『坂田藤十郎—歌舞伎の真髄を生きる』坂田藤十郎(4世)、世界文化社、2,699円
『茂山家の人びと—京都の狂言師』橋蓮二、小佐田定雄、立川志の輔、淡交社、1,680円
『三味線語り』本条秀太郎、淡交社、2,999円
『「週刊」人間国宝3(芸能・歌舞伎1)』朝日新聞社、476円
『「週刊」人間国宝15(芸能・歌舞伎2)』朝日新聞社、533円
『「週刊」人間国宝16(芸能・歌舞伎3)』朝日新聞社、533円
『「週刊」人間国宝20(芸能・歌舞伎4)』朝日新聞社、533円
『図説雅楽入門事典』芝祐靖監修、遠藤徹、笹本武志、柏書房、9,975円
『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム(幼稚園から高等学校まで)』日本学校音楽教育実践学会、東京書籍、2,625円
『戦国武将と能』曾我孝司、雄山閣、2,730円
『千年の響き正倉院楽器復元とアンサンブルオリジン』谷口雅春、小学館スクウェア、1,799円
『田植え唄と日本人(民謡地図)』竹内勉、本阿弥書店、4,200円
『田植え唄と日本人』竹内勉、本阿弥書店、4,000円
『谷川俊太郎が聞く、武満徹の素顔』小沢征爾、谷川俊太郎、小学館、2,730円
『聴衆をつくる—音楽批評の解体文法』増田聡、青土社、2,310円
『天才音楽家・瀧廉太郎、二十一世紀に蘇る』渡辺かぞい、近代文芸社、945円
『富永仲基の「楽律考」 儒教と音楽について』富永仲基、横田庄一郎、朔北社、2,940円
『日本地芝居写真紀行』山口清文、スタジオK、2,940円
『日本の民俗芸能調査報告書集成11(中部地方の民俗芸能4—静岡・愛知)』三隅治雄(他)編、海路書院、34,650円
『日本の民俗芸能調査報告書集成9(中部地方の民俗芸能2—石川・福井)』三隅治雄(他)編、海路書院、29,400円
『日本レコード文化史』倉田喜弘、岩波書店、1,155円
『能—粟谷菊生舞台写真集』鳥居明雄、吉越研、ペリかん社、5,880円
『能の歳時記』村瀬和子、岐阜新聞社、2,000円
『能のふるさと散歩・下(東北~九州編)』岩田彰、日本放送出版協会、2,940円
『能へのいざない—能役者が伝える能のみかた』味方玄、淡交社、2,625円
『花のほかには松ばかり—謡曲を読む愉しみ』山村修、繪書店、1,995円
『琵琶を知る』中村鶴城、出版芸術社、2,940円
『福耳落語』三宮麻由子、日本放送出版協会、1,470円
『PLANET INDIA—インド・エキゾ音楽紀行』サラーム海上、河出書房新社、1,575円
『ほんとうはおもしろいぞ歌舞伎—菅原伝授手習鑑』沼野正子、汐文社、1,575円
『よくわかる日本音楽—基礎講座雅楽から民謡まで』福井昭史、音楽之友社、2,310円
『落語「通」入門』桂文我(4代目)、集英社、735円
『落語美学』江国滋、筑摩書房、819円
『リズム、音楽、脳—神経学的音楽療法の科学的根拠と臨床応用』協同医書出版社、5,250円
『ロシア音楽事典』日本・ロシア音楽家協会、河合楽器製作所出版事業部、3,990円
『露和・和露音楽用語小辞典』石田一志、アレクサンダー・コスチルキ編、朔北社、2,520円
『ワキから見る能世界』安田登、日本放送出版協会、777円

新発売視聴覚資料

●DVD

- 『能楽名演集—能「隅田川」観世流、梅若六郎』NHKエンタープライズ、4,935円
『能楽名演集—能「鉢木」宝生流、近藤乾三』NHKエンタープライズ、4,935円
『能楽名演集—能「頼政/弱法師」喜多流』NHKエンタープライズ、4,935円
『能楽名演集—能「井筒」観世流、観世寿夫』NHKエンタープライズ、4,935円
『能楽名演集—能「黒塚」金春流、「葵上」金剛流』NHKエンタープライズ、4,935円
『能楽名演集—仕舞・独吟・一調・舞囃子集』NHKエンタープライズ、4,935円

『能楽名演集BOXセット』NHKエンタープライズ、29,610円、
能「隅田川」・能「鉢木」・能「経正・弱法師」・能「井筒」・
能「黒塚・葵上」・「仕舞・独吟・一調・舞囃子集」の6枚
が入ったBOXセット

●CD

『人間国宝 長唄 七世 芳村伊十郎』COCJ-33970、2,940円
『人間国宝 義太夫 豊竹山城少掾』COCJ-33971、2,940円
『人間国宝 常磐津 常磐津一巴太夫』COCJ-33972、2,940円
『人間国宝 清元 清元志寿太夫』COCJ-33973、2,940円
『人間国宝 地歌 藤井久仁江』COCJ-33974、2,940円
『人間国宝 尺八(琴古流) 青木鈴慕』COCJ-33975、2,940円
『人間国宝 尺八(都山流) 山本邦山』COCJ-33976、2,940円
『人間国宝 鼓 堅田喜三久』COCJ-33977、2,940円
『人間国宝 沖縄 照喜名朝一・島袋光史』COCJ-33978、
2,940円

『人間国宝 三味線 杵屋五三郎』COCJ-33979、2,940円

*以上、人間国宝シリーズ第1回

第37回通常総会議事録(抄)・添付書類

編集後記

役員改選にともない、新しい会報編集委員会が発足しました。会報編集は初めてというフレッシュなメンバーも加わりました。どうぞ、よろしくお願いいたします。

情報が多様化する現在、学会活動にも柔軟かつ幅広い展開が求められています。それを支える一翼として、より充実した内容の編集を目指していきたいと思っております。忌憚のないご意見、斬新なご提案など、ぜひ、お寄せください。

次号は、5月20日発行の予定です。先ごろ行われた学会主催の公開シンポジウムのご報告、秋の大会のご案内などを掲載いたします。

会報編集委員会

理事：尾高暁子、野川美穂子

参事：青柳万紀子、重田絵美、柴田真希、新堀欽乃、瀧知也、
星野厚子、柳澤久美子

1. 日 時：平成18(2006)年10月8日(日) 13:30~15:00
2. 場 所：京都市立芸術大学日本音楽研究センター
合同研究室1
3. 出席者：268名(委任状出席 208名を含む)
〔備考〕正会員 688名、定足数 229名
4. 議事事項と審議の経過および結果

定款第21条および第15条2により久保田敏子副会長(塚田健一会長代理)が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで副議長選出が行われ、梅田英春、竹内有一両氏が選出された後、以下の議事を開始した。

第1号議案 役員改選の件

柿木吾郎選挙管理委員会委員長が「役員改選」(【添付書類1】)について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第2号議案 平成17(2005)年度 事業報告の件

遠藤徹理事(総務担当)が「平成17(2005)年度 事業報告」(【添付書類2】)について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第3号議案 平成17(2005)年度 総括収支決算の件

薦田治子理事(経理担当)が「平成17(2005)年度 総括収支決算」(【添付書類3】)について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

開票場所 東京芸術大学音楽学部5-314室

第4号議案 平成18(2006)年8月31日現在 総括貸借対照表の件

薦田治子理事(経理担当)が「平成18(2006)年現在 総括貸借対照表」(【添付書類4】)について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。また、山口修監事が「監査報告書」(【添付書類10】)を朗読説明した。

(1) 監事・理事選挙

有権者数 (2006年7月10日現在)	660名
被選挙権停止者数	8名
被選挙権休止者数	1名
投票者数	117名 (投票率 17.7%)

第5号議案 平成18(2006)年8月31日現在 会員異動状況の件

遠藤徹理事(総務担当)が「平成18(2006)年8月31日現在 会員異動状況」(【添付書類5】)について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

1) 監事

総票数	228票	無効票数	1票	有効票数	209票
					(うち白票 18)

第6号議案 平成18(2006)年度 事業計画の件

遠藤徹理事(総務担当)が「平成18(2006)年度 事業計画」(【添付書類6】)について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

順位	得票数	氏名
当選 1	17	蒲生 郷昭
当選 2	15	徳丸 吉彦
次点 3	14	山口 修
4	13	小島 美子
5	8	柿木 吾郎
6	8	草野 妙子
7	6	小柴 はるみ

(5票以下省略)

第7号議案 平成18(2006)年度 総括収支補正予算の件

薦田治子理事(経理担当)が「平成18(2006)年度 総括収支補正予算」(【添付書類7】)について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

2) 理事

総票数	912票	無効票数	0票	有効票数	849票
					(うち白票 63)

第8号議案 平成19(2007)年度 事業計画の件

遠藤徹理事(総務担当)が「平成19(2007)年度 事業計画」(【添付書類8】)について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第9号議案 平成19(2007)年度 総括収支予算の件

薦田治子理事(経理担当)が「平成19(2007)年度 総括収支予算」(【添付書類9】)について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

順位	得票数	氏名
当選 1	42	植村 幸生
当選 2	39	塚原 康子
当選 3	36	薦田 治子
当選 4	28	加藤 富美子
当選 4	28	野川 美穂子
当選 6	24	塚田 健一
7	23	蒲生 郷昭
7	23	徳丸 吉彦
当選 9	22	久万田 晋
当選 10	20	月溪 恒子
当選 10	20	茂手木 潔子
次点 12	15	小塩 さとみ
当選 12	15	寺内 直子
12	15	永原 恵三
15	13	大谷 紀美子
15	13	福岡 正太
17	12	澤田 篤子
18	11	尾高 暁子
18	11	上参郷 祐康

第10号議案 定款変更の件

遠藤徹理事より、平成20(2008)年に法人の管轄が文部科学省から内閣府に移行し大きな変革が予想される為、今回の定款変更は見送るとの旨が報告された。

【添付書類1】

役員選出資料

1. 2006年度役員選挙 開票結果

投票締切日 2006年9月7日(木)

開票日時 2006年9月9日(土) 午前10時より午後5時

18 11 小島 美子
 18 11 竹内 有一
 (10票以下省略)

22 6 田中 美加
 22 6 飯島 一彦
 22 6 福島 和夫
 (5票以下省略)

*蒲生郷昭、徳丸吉彦の2名は、監事に当選した者と認め、理事当選者から除いた。

*当選順位10位(得票順12位)が3名となったため、開票直後に選挙管理委員によって抽選を行った。その結果、寺内直子が当選者、小塩さとみが次点者となった。

*徳丸吉彦、蒲生郷昭の2名は、監事に当選した者と認め、東日本支部委員当選者から除いた。

*塚原康子、植村幸生、野川美穂子、薦田治子、茂手木潔子、加藤富美子の6名は、理事に当選した者と認め、東日本支部委員当選者から除いた。

*当選順位10位(得票順18位)が4名となったため、開票直後に選挙管理委員によって抽選を行った。その結果、近藤静乃が次点者となった。

(2) 支部委員選挙

1) 東日本支部 支部委員

有権者数(2006年7月10日現在) 385名
 被選挙権停止者数 9名
 被選挙権休止者数 1名
 投票者数 79名(投票率 20.5%)
 総票数 553票 無効票数 5票 有効票数 487票
 (うち白票 61)

順位	得票数	氏名
1	24	塚原 康子
2	19	植村 幸生
3	17	野川 美穂子
4	14	薦田 治子
4	14	茂手木潔子
当選 6	13	早稲田みな子
当選 7	12	尾高 暁子
当選 8	11	奥山 けい子
8	11	徳丸 吉彦
10	10	加藤 富美子
10	10	蒲生 郷昭
当選 10	10	上参郷祐康
当選 10	10	内田 順子
当選 14	9	井上 貴子
当選 14	9	永原 惠三
当選 14	9	谷垣内和子
当選 17	8	横井 雅子
18	7	岡崎 淑子
次点 18	7	近藤 静乃
18	7	高瀬 澄子
18	7	中村 美奈子
22	6	ネルソン, S. G.
22	6	柿木 吾郎
22	6	小柴 はるみ
22	6	塚田 健一

2) 西日本支部 支部委員

有権者数(2006年7月10日現在) 219名
 被選挙権停止者数 6名
 被選挙権休止者数 0名
 投票者数 29名(投票率 13.2%)
 総票数 145票 無効票数 0票 有効票数 141票
 (うち白票 4)

順位	得票数	氏名
当選 1	9	大谷 紀美子
2	7	月溪 恒子
当選 2	7	山口 修
当選 4	6	龍村 あや子
当選 4	6	寺田 吉孝
当選 4	6	中川 真
7	4	岩井 正浩
7	4	奥中 康人
7	4	竹内 有一
当選 7	4	谷 正人
7	4	福岡 まどか
次点 7	4	水野 信男
13	3	井口 はる菜
13	3	今田 健太郎
13	3	ギニャール, シルヴァン
13	3	櫻井 哲男
13	3	瀬山 徹

(2票以下省略)

*月溪恒子は、理事に当選した者と認め、西日本支部委員当選者から除いた。

*当選順位3位(得票順7位)が6名となったため開票直後に選

挙管理委員によって抽選を行った。その結果、谷正人が当選者、水野信男が次点者となった。

3) 沖縄支部 支部委員

有権者数(2006年7月10日現在) 21名
被選挙権停止者数 3名
被選挙権休止者数 0名
投票者数 5名(投票率 23.8%)
総票数 10票 無効票数 0票 有効票数 10票
(うち白票 0)

順位	得票数	氏名
1	4	久万田 晋
当選	2	3 大塚 拝子
次点	3	1 蒲生 美津子
当選	3	1 狩俣 康子
当選	3	1 新城 亘

*久万田晋は、理事に当選した者と認め、沖縄支部委員当選者から除いた。

*当選順位2位(得票順3位)が3名となったため、開票直後に選挙管理委員によって抽選を行った。その結果、狩俣康子、新城亘の2名が当選者、蒲生美津子が次点者となった。

2. 選考過程

(1) 監事・理事選挙

理事・監事の選出については、定款施行細則第8条から第13条までの各条に準拠し、選挙管理委員会の定める選出要項に基づいておこなわれた。

選挙管理委員会からの開票結果の報告を受けた会長が、各当選者に当選の通知を行った。塚田健一より、健康上の理由により辞退したい旨の申し出があったので、それを了承し、次点の小塩さとみを繰上げ当選とした。

定款施行細則第8条に基づき、理事当選者10名にたいして、他の5名を合議する会議を招集した。その合議の結果、大谷紀美子、尾高暁子、澤田篤子、永原惠三、福岡正太の5名が理事として推薦された。

(2) 支部委員選挙

支部委員の選出については、支部規程第6条に準拠し、選挙管理委員会の定める選出要項に基づいておこなわれた。

1) 東日本支部 支部委員

選挙管理委員会からの開票結果の報告、および理事推薦の報告を受けた支部長加藤富美子は、選挙管理委員会に対して、推薦理事の決定によって生じる支部委員繰上げ当選者2名の

決定を依頼した。選挙管理委員会では、次点者近藤静乃については繰上げ当選を認め、得票順18位となる3名については選挙管理委員会で抽選の結果、岡崎淑子を繰上げ当選、中村美奈子を次点とすることを決定した。

この結果に基づき、支部長は各当選者に当選の通知を行った。上参郷祐康、谷垣内和子の2名より健康上の理由により辞退したい旨の申し出があったので、それを了承し、次点の中村美奈子、および次点者と得票同数となる高瀬澄子を繰り上げ当選とした。

また、支部長は、支部規程第6条第4項に基づき、支部委員当選者9名にたいして、他の4名を合議する会議を招集した。その合議の結果、金光真理子、小柴はるみ、田中美加、前原恵美の4名が支部委員として推薦された。

2) 西日本支部 支部委員

選挙管理委員会からの開票結果の報告、および理事推薦の報告を受けた支部長寺内直子は、選挙管理委員会に対して、推薦理事の決定によって生じる支部委員繰上げ当選者1名の決定を依頼した。選挙管理委員会では、次点者水野信男について繰上げ当選を認めた。この結果に基づき、支部長は各当選者に当選の通知を行った。

また、支部長は、支部規程第6条第4項に基づき、支部委員当選者6名にたいして、他の3名を合議する会議を招集した。その合議の結果、岩井正浩、奥中康人、竹内有一の3名が支部委員として推薦された。

3) 沖縄支部 支部委員

選挙管理委員会からの開票結果の報告、および理事推薦の報告を受けた支部長金城厚は、各当選者に当選の通知をすると共に、支部規程第6条第4項に基づき、支部委員当選者3名にたいして、他の1名を合議する会議を招集した。その合議の結果、マツト・ギランが支部委員として推薦された。

3. 2006年度役員選挙 選出結果

(1) 監事・理事

1) 監事2名

蒲生 郷昭 徳丸 吉彦

2) 理事15名

植村 幸生 塚原 康子

大谷 紀美子 月溪 恒子

小塩 さとみ 寺内 直子

尾高 暁子 永原 惠三

加藤 富美子 野川 美穂子
久万田 晋 福岡 正太
薦田 治子 茂手木 潔子
澤田 篤子

(2) 支部委員

1) 東日本支部 支部委員13名

井上 貴子 高瀬 澄子
内田 順子 田中 美加
岡崎 淑子 中村 美奈子
奥山 けい子 前原 恵美
金光 真理子 横井 雅子
小柴 はるみ 早稲田 みな子
近藤 静乃

2) 西日本支部 支部委員9名

岩井 正浩 中川 真
奥中 康人 谷 正人
竹内 有一 水野 信男
龍村 あや子 山口 修
寺田 吉孝

3) 沖縄支部 支部委員4名

大塚 栞子 新城 亘
狩俣 康子 マット・ギラン

(社)東洋音楽学会2006年度選挙管理委員

柿木 吾郎(委員長)
植村 幸生(副委員長)
葛西 周
金光 真理子
前島 美保
増野 亜子
森田 都紀

【添付書類2】平成17年度(2005年度)事業報告

(自平成17年(2005年)9月1日 至平成18年(2006年)8月31日)

1. 事業の状況

〔1〕研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2005年10月1日
- ・会場 札幌大谷短期大学

- ・課題 「口琴の音を解剖する」

(2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2005年10月2日
- ・会場 札幌大谷短期大学
- ・発表件数 19件、シンポジウム 1件、フォーラム 1件

(3)次年度大会の準備

- ・日時 2006年10月7日-8日
- ・会場 京都市立芸術大学

(4)定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 7回(第21回-第27回 9・12・2・3・4・6・7月)
- ・会場 国立歴史民俗博物館、お茶の水女子大学、東京芸術大学、東京学芸大学
- ・内容 研究発表、調査報告、卒業論文・修士論文・博士論文発表、展示見学等

○西日本支部

- ・回数 5回(第225回-第229回 10・11・3・5・6月)
- ・会場 大阪音楽大学、京都市立芸術大学、広島大学、神戸大学
- ・内容 研究発表、レクチャーコンサート、パネル、修士論文・博士論文発表
- ・備考 10月、3月、5月、6月の定例研究会(第225回、第227回、第228回、第229回)は日本音楽学会関西支部と合同

○沖縄支部

- ・回数 3回(第43回-第45回 3・4・7月)
- ・会場 沖縄県立芸術大学
- ・内容 研究発表、修士論文・博士論文発表、演奏家に関するシンポジウム

〔2〕学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第5条2)

○第71号の編集・刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、吉川英史名誉会員追悼文・年譜・業績、特集、研究動向、書評・視聴覚資料評・書籍紹介・視聴覚資料紹介・彙報

(6)会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

- ・第66号(2006年1月)、第67号(2006年5月)、第68号(2006年8月)
- ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

- ・第9号(2005年11月)、第10号(2006年3月)、第11号(2006年5月)

- ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声、その他
 - 『西日本支部だより』
 - ・第54号(2006年1月)、第55号(2006年4月)、第56号(2006年8月)
 - ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知、その他
 - 『沖縄支部通信』
 - ・第32号(2006年7月)
 - ・内容 例会案内、発表要旨・質疑記録
 - [3] 関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)
 - (7) 日本学術会議への協力
 - 会員山口修氏を芸術学研究連絡委員会委員として派遣(2005年9月末まで)
 - 日本学術会議協力学術研究団体への申込
 - (8) 音楽文献目録委員会への参加
 - 会員奥山けい子氏(2006年3月末まで)、田中多佳子氏(2006年3月末まで)、千葉優子氏(2006年4月以降)、横井雅子氏(2006年4月以降)、根岸正海氏を委員として派遣
 - (9) 国際伝統音楽学会(ICTM)への協力
 - 日本国内委員会として加盟
 - (10) 芸術学関連学会連合への参加
 - 会員遠藤徹氏を委員として派遣
 - [4] 研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)
 - (11) 「田邊尚雄賞」
 - 第22回田邊尚雄賞の授賞
 - ・日時 2005年10月1日
 - ・受賞者および授賞対象
山口修『応用音楽学と民族音楽学』(放送大学教育振興会 2004年3月発行)
金城厚『沖縄音楽の構造 歌詞のリズムと楽式の理論』(第一書房 2004年3月発行)
 - 第23回田邊尚雄賞の選考と発表
 - ・受賞者および授賞対象
遠藤徹『平安朝の雅楽 古楽譜による唐楽曲の楽理的研究』(東京堂出版 2005年2月発行)
横道萬里雄『体現芸術として見た寺事の構造』(岩波書店 2005年12月)
 - [5] 研究および調査(定款第5条5)
 - (12) 国内または国外における学術調査および研究とくになし
 - [6] その他目的を達成するために必要な事項(定款第5条6)
 - (13) 東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供
 - (14) 公開シンポジウム「伝統文化の継承と発展-音楽教育の現場から」の企画・準備
- 【添付書類6】平成18年度(2006年度)事業計画
(自平成18年(2006年)9月1日 至平成19年(2007年)8月31日)
1. 事業の状況
 - [1] 研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)
 - (1) 公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)
 - ・日時 2006年10月7日
 - ・会場 京都市立芸術大学
 - ・課題 「音楽の知そして平和」
 - (2) 研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)
 - ・日時 2006年10月8日
 - ・会場 京都市立芸術大学
 - ・発表件数 10件
 - (3) 次年度大会の準備
 - ・日時 2007年10月(予定)
 - ・会場 未定
 - (4) 定例研究会(定款施行細則第3条3)
 - 東日本支部
 - ・回数 6回(第28回〜第33回 12・2・3・4・6・7月)
 - ・会場 東京芸術大学、お茶の水女子大学ほか
 - ・内容 研究発表、シンポジウム、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか
 - 西日本支部
 - ・回数 5回(第230回〜第234回 9・11・2・4・6月)
 - ・会場 大阪音楽大学ほか
 - ・内容 研究発表、修士論文・博士論文発表ほか
 - 沖縄支部
 - ・回数 3回(第46回〜第48回 11・3・6月)
 - ・会場 沖縄県立芸術大学
 - ・内容 研究発表、作曲家に聞く、修士論文・博士論文発表ほか
- [2] 学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)
- (5) 機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第5条2)
- 第72号の編集・刊行
 - ・内容 会員の論文、研究ノート、研究動向、書評・視聴覚資料評・書籍紹介・視聴覚資料紹介ほか
- (6) 会報の刊行
- 『東洋音楽学会会報』
 - ・第69号(2007年1月)、第70号(2007年5月)
 - ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案

- 内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息
- 『東日本支部だより』
 - ・第12号(2006年11月)、第13号(2007年3月)、第14号(2007年5月)
 - ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか
 - 『西日本支部だより』
 - ・第57号(2006年12月)、第58号(2007年3月)、第59号(2007年8月)
 - ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか
 - 『沖縄支部通信』
 - ・第33号(2007年1月)、第34号(2007年6月)
 - ・内容 例会案内、発表要旨・質疑記録
 - 〔3〕関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)
 - (7)日本学術会議への協力
 - 日本学術会議協力学術研究団体として協力
 - (8)音楽文献目録委員会への参加
 - 会員三名を委員として派遣
 - (9)国際伝統音楽学会(ICTM)への協力
 - 日本国内委員会として加盟
 - (10)藝術学関連学会連合への参加
 - 会員一名を委員として派遣
 - 〔4〕研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)
 - (11)「田邊尚雄賞」
 - 第23回田邊尚雄賞の授賞
 - ・日時 2006年10月7日
 - ・受賞者および授賞対象
 - 遠藤徹『平安朝の雅楽 古楽譜による唐楽曲の楽理的研究』(東京堂出版 2005年2月発行)
 - 横道萬里雄『体現芸術として見た寺事の構造』(岩波書店 2005年12月)
 - 第24回田邊尚雄賞の選考と発表(2007年4月予定)
 - 〔5〕研究および調査(定款第5条5)
 - (12)国内または国外における学術調査および研究とくになし
 - 〔6〕その他目的を達成するために必要な事項(定款第5条6)
 - (13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供
 - (14)公開シンポジウム「伝統文化の継承と発展—音楽教育の現場から」の開催
 - ・日時 2007年1月13日
 - ・会場 イイノホール
 - 【添付書類8】平成19年度(2007年度)事業計画(自平成19年(2007年)9月1日 至平成20年(2008年)8月31日)
 - 1. 事業の状況
 - 〔1〕研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)
 - (1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)
 - ・日時 2007年10月(予定)
 - ・会場 未定
 - (2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)
 - ・日時 2007年10月(予定)
 - ・会場 未定
 - (3)次年度大会の準備
 - ・日時 2008年10月(予定)
 - ・会場 未定
 - (4)定例研究会(定款施行細則第3条3)
 - 東日本支部
 - ・回数 6回(第34回—第39回 12・2・3・4・6・7月)
 - ・会場 東京芸術大学、お茶の水女子大学ほか
 - ・内容 研究発表、シンポジウム、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか
 - 西日本支部
 - ・回数 5回(第235回—第239回 9・12・3・4・6月)
 - ・会場 大阪音楽大学ほか
 - ・内容 研究発表、修士論文・博士論文発表ほか
 - 沖縄支部
 - ・回数 3回(第49回—第51回 11・3・6月)
 - ・会場 沖縄県立芸術大学
 - ・内容 研究発表、修士論文・博士論文発表ほか
 - 〔2〕学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)
 - (5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第5条2)
 - 第73号の編集・刊行
 - ・内容 会員の論文、研究ノート、研究動向、書評・視聴覚資料評・書籍紹介・視聴覚資料紹介ほか
 - (6)会報の刊行
 - 『東洋音楽学会会報』
 - ・第71号(2007年9月)、第72号(2008年1月)、第73号(2008年5月)
 - ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息
 - 『東日本支部だより』
 - ・第15号(2007年11月)、第16号(2008年3月)、第17号(2008年5月)

- ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか
- 『西日本支部だより』
 - ・第60号(2008年1月)、第61号(2008年3月)、第62号(2008年8月)
 - ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか
- 『沖縄支部通信』
 - ・第35号(2008年1月)、第36号(2008年6月)
 - ・内容 例会案内、発表要旨・質疑記録
- 〔3〕関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)
- (7)日本学術会議への協力
- 日本学術会議協力学術研究団体として協力
- (8)音楽文献目録委員会への参加
- 会員三名を委員として派遣
- (9)国際伝統音楽学会(ICTM)への協力
- 日本国内委員会として加盟
- (10)芸術学関連学会連合への参加
- 会員一名を委員として派遣
- 〔4〕研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)
- (11)「田邊尚雄賞」
- 第24回田邊尚雄賞の授賞(2007年10月予定)
- 第25回田邊尚雄賞の選考と発表(2008年4月予定)
- 〔5〕研究および調査(定款第5条5)
- (12)国内または国外における学術調査および研究とくになし
- 〔6〕その他目的を達成するために必要な事項(定款第5条6)
- (13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

【添付書類10】

社団法人東洋音楽学会会長 塚田健一殿

監査報告書

社団法人東洋音楽学会の平成17年度財産の状況ならびに、業務執行の状況を監査しましたが、健全に運営されていることを認めます。

平成18年9月22日

監事 竹内道敬

監事 山口 修

【添付書類 3】

総括収支計算書

平成17年9月1日から平成18年8月31日まで

社団法人 東洋音楽学会

(単位 円)

科 目	本 部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	研究成果公開 特別会計	調 整	合 計
I 収入の部								
1 基本財産運用収入	2,691	0	0	0	0		0	2,691
基本財産利息収入	2,691	0	0	0	0			2,691
2 会 費 収 入	5,244,000	803,000	0	0	0		0	6,047,000
正会員会費収入	4,684,000	0	0	0	0			4,684,000
賛助会員会費収入	400,000	0	0	0	0			400,000
特別会員会費収入	160,000	0	0	0	0			160,000
大会参加費収入	0	210,000	0	0	0			210,000
その他の収入	0	593,000	0	0	0			593,000
3 寄付金・賛助金 収 入	0	0	0	0	0		0	0
一般寄付金収入	0	0	0	0	0			0
賛助金収入	0	0	0	0	0			0
4 事 業 収 入	462,000	39,200	300	0	7,500		0	509,000
機関誌発行事業収入	462,000	0	0	0	0			462,000
その他の収入	0	39,200	300	0	7,500			47,000
5 補助金等収入						1,230,000		1,230,000
国庫補助金						1,230,000		1,230,000
6 雑 収 入	8,336	3,500	10	22	1	77	0	11,946
受 取 利 息	8,336	0	10	22	1	77		8,446
雑 収 入		3,500						3,500
7 特定基金取崩収入	200,000							200,000
8 その他資産取崩収入	100,000							100,000
9 繰 入 収 入	0	171,342	411,813	207,129	44,379		△834,663	0
当期収入合計(A)	6,017,027	1,017,042	412,123	207,151	51,880	1,230,077	△834,663	8,100,637
前期繰越収支差額	4,906,274	0	0	0	0		0	4,906,274
収入合計(B)	10,923,301	1,017,042	412,123	207,151	51,880	1,230,077	△834,663	13,006,911
II 支出の部								
1 事 業 費	2,414,748	1,017,042	412,123	207,151	51,880		0	4,102,944
機関誌作成費	998,626	0	0	0	0			998,626
負担金	203,307	0	0	0	0			203,307
印刷費	350,217	271,272	147,597	135,765	21,000			925,851
例会運営費	0	0	68,736	0	25,000			93,736
田邊尚雄賞賞金	226,100	0	0	0	0			226,100
通信費	402,150	19,350	164,170	61,650	5,000			652,320
旅費交通費	202,996	160,213	5,340	0	0			368,549
事務用品費	0	0	4,315	3,001	880			8,196
会議費	31,352	27,591	1,430	2,108	0			62,481
給料手当	0	163,800	15,750	3,000	0			182,550
その他	0	374,816	4,785	1,627	0			381,228
2 管 理 費	2,542,800	0	0	0	0		0	2,542,800
給料手当	1,314,351	0	0	0	0			1,314,351
通信費	80,428	0	0	0	0			80,428
事務用品費	42,194	0	0	0	0			42,194
事務所費	746,456	0	0	0	0			746,456
事務委託料	300,000	0	0	0	0			300,000
雑 費	59,371	0	0	0	0			59,371
3 繰 入 金 支 出	834,663	0	0	0	0		△834,663	0
本支部繰入金支出	663,321						△663,321	0
大会特別会計支出	171,342						△171,342	0
4 特定預金等繰入支 出	3,563,298	0	0	0	0	1,004,762	0	4,568,060
5 固定資産購入支 出	263,382	0	0	0	0		0	263,382
当期支出合計(C)	9,618,891	1,017,042	412,123	207,151	51,880	1,004,762	△834,663	11,477,186
当期収支差額(A)-(C)	△3,601,864	0	0	0	0	225,315	0	△3,376,549
次期繰越収支差額(B)-(C)	1,304,410	0	0	0	0	225,315	0	1,529,725

次期繰越収支差額の内訳

(単位 円)

科 目	本 部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	研究成果公開 特別会計	調 整	合 計
現金預金	1,251,410							1,251,410
受取手形	900,000							900,000
前渡金	200,000					225,315		425,315
合計	2,351,410	0	0	0	0	225,315	0	2,576,725
未払金	270,000					0		270,000
前受金	777,000							777,000
合計	1,047,000	0	0	0	0	0	0	1,047,000
次期繰越収支差額	1,304,410	0	0	0	0	225,315	0	1,529,725

【添付書類4】

総括貸借対照表

平成18年8月31日現在

(単位円)

科 目	本 部	研究成果(科研費) 特別会計	合 計
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	1,251,410		1,251,410
受取手形	900,000		900,000
前渡金	200,000	225,315	425,315
流動資産合計	2,351,410	225,315	2,576,725
2 固定資産			
基本財産			
銀行定期預金	5,200,000		5,200,000
基本財産合計	5,200,000	0	5,200,000
基金			
支払準備基金	3,559,456	1,004,762	4,564,218
研究推進事業基金	4,518,900		4,518,900
田邊尚雄賞基金	3,800,000		3,800,000
基金合計	11,878,356	1,004,762	12,883,118
その他の固定資産			
什器備品	300,675		300,675
楽器	8		8
書籍	310,600		310,600
建物取得準備特定預金	1,814,904		1,814,904
差入敷金	300,000		300,000
電話加入権	149,968		149,968
その他の固定資産合計	2,876,155	0	2,876,155
固定資産合計	19,954,511	1,004,762	20,959,273
資産合計	22,305,921	1,230,077	23,535,998
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	270,000		270,000
前受金	777,000		777,000
流動負債合計	1,047,000	0	1,047,000
負債合計	1,047,000	0	1,047,000
iii 正味財産の部			
正味財産	21,258,921	1,230,077	22,488,998
(うち基本金)	(5,200,000)		(5,200,000)
(うち当期正味財産増加額)	(△103,206)	(1,230,000)	(1,126,794)
負債及び正味財産合計	22,305,921	1,230,077	23,535,998

【添付書類5】

会員の異動状況(平成17年.9.1~平成18年.8.31)

会員種別	員 数		増 減	異 動 の 内 訳
	05.9.1	06.8.31		
正会員	659	662	+3	新入+37(うち再入+3)、学生より+4、退会-34、逝去-4
学生会員	6	9	+3	新入+9、正会員へ-4、退会-2
賛助会員	2	2	0	
特別会員	8	7	-1	退会-1
名誉会員	4	3	-1	逝去-1
合 計	679	683	+4	

